帝国を移動する

青山純三とその軌跡

星名宏修（一橋大学）
h.hoshina@r.hit-u.ac.jp

自己紹介

- 日本植民地期の台湾文学　特に「無名」の在台内地人の文学研究

  『植民地を読む－「贋」日本人たちの肖像』（2016）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

- 植民地台湾の「癩短歌」を読む－楽生院慰安会『万寿果』を中心に（2018）
- 植民地台湾の「癩文学」を読む－宮崎勝雄のテクストを中心に（2019）
- 『療養秀歌三千集』を読む（2020）
- 救癩戦線は「御歌」とともに－『万寿果』文芸特輯号を読む（2021）など

はじめに①

『万寿果』（1939.6）に掲載された青山純三の短歌

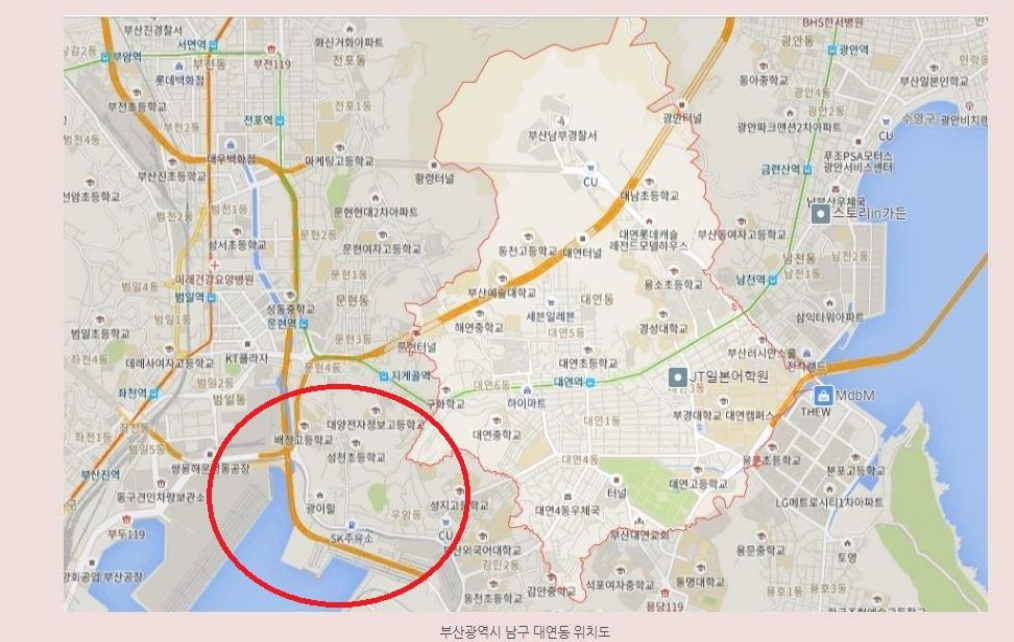
釜山戸谷洞にて

- 列車のカー其のまゝ据えし家もあり戸谷洞は悲しみの洞里（むら）
- 鐘鳴りて集ひし**病友**は会館の板間に坐して賛美歌うたふ
- 会館に続きて小さき部屋のあり事務室（オフイス）注射室（インジユクシヨンルーム）と英字にて書かる

＊この短歌に詠まれた戸谷洞とは？

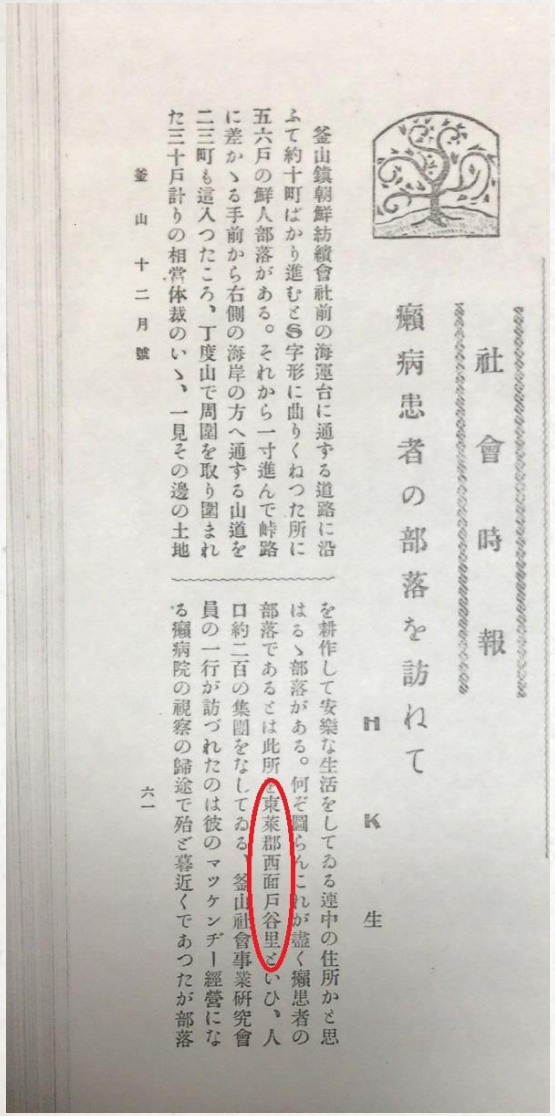
はじめに①・続

- 1907、**釜山癩病院**開院
- 1911年、スコットランド出身の宣教師**マッケンジー**が継承



- 1935年、マッケンジーがスパイ容疑で起訴され、38年にオーストラリアに向かう（＊青山の短歌は、この事件後のもの）
- 1941年、釜山癩病院閉鎖

はじめに①・続続



社會時報

癩病患者の部落を訪ねて

HK生

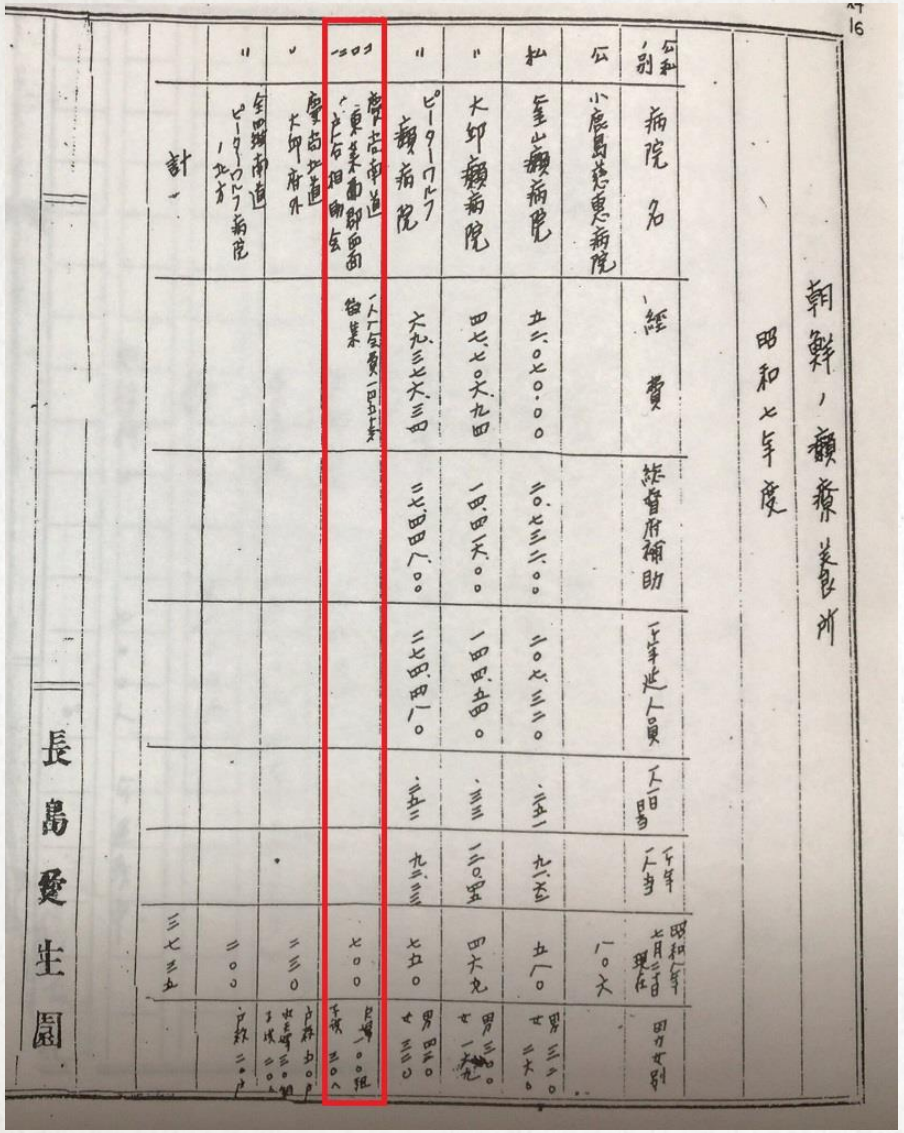
釜山鎮朝鮮紡績會社前の海運台に通ずる道路に沿ふて約十町ばかり進むとS字形に曲りくねつた所に五六戸の鮮人部落がある。それから一寸進んで峠路に差かゝる手前から右側の海岸の方へ通ずる山道を二三町も這入つたころ、丁度山で周圍を取り圍まれた三十戸計りの相當体裁のいゝ、一見その邊の土地を耕作して安樂な生活をしてゐる連中の住所かと思はるゝ部落がある。何ぞ圖らんこれが盡く癩患者の部落であるとは此所東萊郡西面戸谷里といひ、人口約二百の集團をなしてゐる。釜山社會事業研究會員の一行が訪づれたのは彼のマツケンヂー經營になる癩病院の視察の歸途で殆ど暮近くであつたが部落

釜山十二月號　六一

- 何ぞ図らんこれが盡く**癩患者の部落**であるとは此所を**東萊郡西面戸谷里**といひ、**人口約二百の集団**をなしてゐる
- 此所には既に**礼拝堂や治療室**まで設けられ**癩患者相助会**なるものが組織されてゐて部落民は極めて親密を重ねてゐる。
- 彼等の多くは慶尚南北道の者でマツケンヂー経営の癩病院に救はれん事を希つてはるばる出ては来たものゝ既に五百名からの収容者を待つ該病院に此の上救はれる望もないと知つた彼等は偶々其の病院の退院者某々と協定して茲に此の部落を経営したものであると云ふ。

（ＨＫ生「癩病患者の部落を訪ねて」『釜山』1927.12）

はじめに①・続続続



- 慶尚南道東萊郡西面の**戸谷相励会**（コロニー）
- 総督府からの補助はなく、一人入会金一円五十銭
- 1933年7月現在の入所者は700人
- 夫婦100組、子ども30人

（「朝鮮ノ癩療養所」昭和七年度）

はじめに②

- 『万寿果』…台湾のハンセン病療養所楽生院で刊行された文芸雑誌（1934.5頃～1944.1？）
- 釜山戸谷洞の「病友（とも）」＝ハンセン病者を短歌に詠んだ青山純三とはどのような人物なのか？
- 帝国を頻繁に移動した青山純三の軌跡を、彼の創作とあわせて考察する

はじめに③

■青山純三（本名：三井輝一）に言及した主な文献・論文

- 沈田潢著 裴学泰口述訳 滝尾英二文章化「あゝ，70年 輝かしき悲しみの小鹿島」（滝尾英二編『小鹿島「癩」療養所と周防正季 第3輯（下）』人権図書館・広島青丘文庫 1996）
- 滝尾英二「三井輝一の生涯とハンセン病患者たち」（『朝鮮ハンセン病史　日本植民地下の小鹿島』未来社 2001）
- 「青山純三簡紹及其作品摘録」（楽生保留自救会・楽生訪調小組『2020夏・走読楽生版画工作坊手冊』2020）

＊三井輝一：1901年11月25日、山梨県生まれ

1945年7月22日、楽生院で死去（享年44歳）

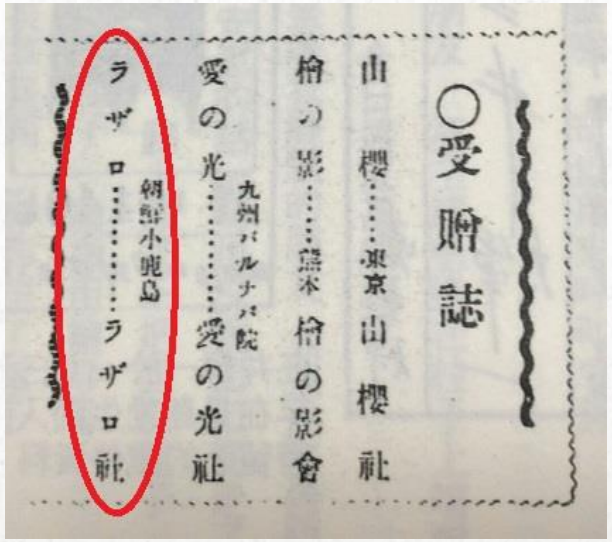
三井輝一と朝鮮①

■林文雄「忘れ得ぬ兄弟　小鹿島を訪ねて」（『日本ＭＬＴ』第20号、1932.10）

- 昭和六年一月一日朝（中略）小鹿島に渡つた。（中略）こゝは地勢の関係上南北二つに病舎が別れてゐる。官舎はその間の高台にある。北が前からの大きい方で五五〇人病者が居た。南は新らしく拡張した方で二百人位しか居ない。この**七五〇人の病者の中二人の内地人が居る。**北のをＮと云ひ、**南のをＭと云ふ。**（中略）南の病舎に居る唯一の邦人はさつき云ふたＭ君である。**彼は草津のＡ先生の処で基督教の福音を聞き新生活に入つた。**朝鮮の癩者を救ふべき使命を感じ唯一人小鹿島に飛込んだ。彼の燃ゆる聖愛は**約半年にして全く鮮語に通ぜしめ**多くの癩者は彼を通じて基督の福音に入つた。

三井輝一と朝鮮①・続

- 彼は**絵に対して立派な才能**を持つて居た。自分の生涯をぶち込んで精進すべきものはこの芸術の外にない。若い長髪の美術学生はひたむきにこの道を進んだ。併しその途中に於て**癩がすべてを暗黒にした。**（中略）
- 彼の出して居る**「ラザロ」は僅か十二頁の謄写版の小雑誌**であるが、全く独特のものである。**一頁の上半分は日本語、下半分は鮮語**である。


○受贈誌
山櫻……東京山櫻社
檜の影……熊本檜の影會
愛の光……九州バルナバ院愛の光社
ラザロ……朝鮮小鹿島ラザロ社

『高原』（1934.2）の受贈誌欄

三井輝一と朝鮮①・続続

■1922年、ハンセン病者で**ホーリネス教会**の**安倍千太郎**（「草津のＡ先生」）が「**草津明星団**」設立

- 三井輝一も草津明星団に参加（小倉兼治『瀬戸のあけぼの』）
- **ホーリネス教会…近代医療を徹底的に拒否**

  神・聖霊への信仰による「神癒（いやし）」

  公的な医療から疎外された多くの病者を吸収

  大正後期から昭和初期に飛躍的に成長
- 小鹿島のキリスト教会設立は、1922年10月に田中真三郎牧師（聖潔教会・ホーリネス）が総督府の許可を得て集会をもったのがきっかけ

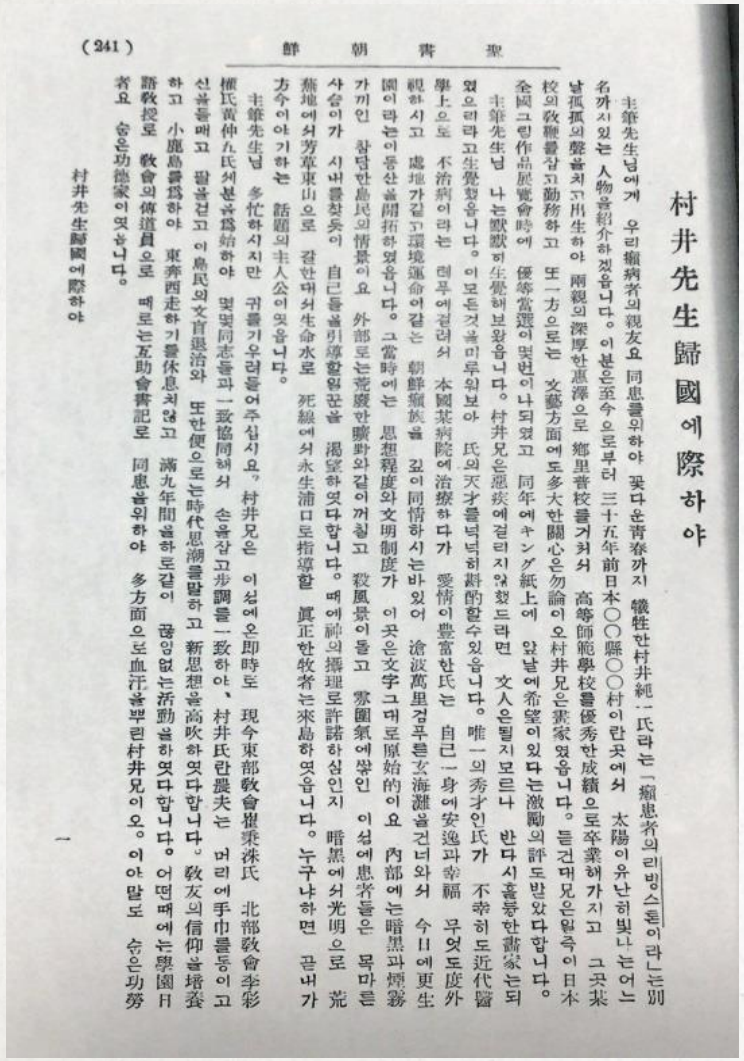
三井輝一と朝鮮②

■金昌洙「不幸児の楽園（其の三）小鹿島癩療養所訪問記（完）」（『東亜日報』1934.9.20、原文は朝鮮語）

- 少年少女患者も百人ほどいて、彼らはそこで勉強しているそうです。日本内地の患者が、南北病舎にひとりずつ収容されているのですが、南病舎の患者は高等師範出身、北病舎にいる患者は東京外国語学校出身で、相当な知識階級の人たちだそうです。彼らはそれぞれ六畳のたたみ部屋をひとりで使っていますが、風景画や書画などが部屋のそこここに整然と飾られており、机には花の鉢や文房具が置かれ、本棚には各種の書籍と雑誌が置かれていて外国書籍もたくさんあります。（中略）肉体的には病んでいても、精神的にはまったく書生として、研究に没頭し、修養につとめていることをうかがわせます。

- 彼らが、ここの少年少女を指導し、教育する教育者だそうです。彼らは朝鮮語にも通じ、初歩の生徒を教えるのに困難を感じず、忠実な教育者として、同じ病気に苦しむ幼い患者を相手に、楽しく日々を暮らしているというから、それこそ砂漠に咲く美しい花といえましょう。

三井輝一と朝鮮③



（241）　聖書朝鮮

村井先生歸國에際하야

主筆先生님에게 우리癩病者의親友요 同患를위하야 꽃다운靑春까지 犧牲한村井純一氏라는「癩患者의리빙스톤」이라는別名까지있는 人物을紹介하겠읍니다。이분은至今으로부터 三十五年前日本○○縣○○村이란곳에서 太陽이유난히빛나는어느날孤孤의聲을치고出生하야 兩親의深厚한惠澤으로 鄕里普校를거치서 高等師範學校를優秀한成績으로卒業해가지고 그곳某校의敎鞭을잡고勤務하고 또一方으로는 文藝方面에도多大한關心은勿論이오村井兄은畫家였읍니다。듣건대兄은일즉이日本全國그림作品展覽會時에 優等當選이몇번이나되였고 同年에キング紙上에 앞날에希望이있다는激勵의評도받았다합니다。

主筆先生님 나는默默히生覺해보았읍니다。村井兄은惡疾에걸리지않었드라면 文人은될지모르나 반다시훌륭한畫家는되였으리라고生覺합니다。이모든것을미루워보아 氏의天才를넉넉히斟酌할수있읍니다。唯一의秀才인氏가 不幸히도近代醫學上으로 不治病이라는 렌루에걸려서 本國某病院에治療하다가 愛情이豊富한氏는 自己一身에安逸과幸福 무엇도度外視하시고 處地가같고環境運命이같은 朝鮮癩族을 깊이同情하시는바있어 滄波萬里검푸른玄海灘을건너와서 今日에更生國이라는이듬산을開拓하였읍니다。그當時에는 思想程度와文明制度가 이곳은文字그대로原始的이요 內部에는暗黑과煙霧가끼인 황당한島民의情景이요 外部로는荒廢한曠野와같이꺼칠고 殺風景이돌고 雰圍氣에쌓인 이섬에患者들은 목마른사슴이가 시내를찾듯이 自己들을引導할임꾼을 渴望하였다합니다。때에神의攝理로許諾하심인지 暗黑에서光明으로 荒蕪地에서芳草東山으로 갈한대서生命水로 死線에서永生浦口로指導함 眞正한牧者는來島하였읍니다。누구냐하면 곧내가 方今이야기하는 話題의主人公이였읍니다。

主筆先生님 多忙하시지만 귀를기우려들어주십시요。村井兄은 이섬에온即時로 現今東部敎會崔乘洙氏 北部敎會李彩權氏黃仲九氏세분과爲始하야 몇몇同志들과一致協同해서 손을잡고步調를一致하야、村井氏란農夫는 머리에手巾를동이고 신을매고 팔을걷고 이島民의文盲退治와 또한便으로는時代思潮를말하고 新思想을高吹하였다합니다。敎友의信仰을培養하고 小鹿島를爲하야 東奔西走하기를休息치않고 滿九年間을하로같이 끊임없는活動을하였다합니다。어떤때에는學園日語敎授로 敎會의傳道員으로 때로는互助會書記로 同患을위하야 多方面으로血汗을뿌린村井兄이오。이야말로 숨은功勞者요 숨은功德家이였읍니다。

村井先生歸國에際하야

一

■村井先生帰国に際して（1935年11月1日『聖書朝鮮』第82号）

- 編集長（＝金教巨・1920年に東京牛込のホーリネス教会で洗礼）さまへ　我々らい病患者の親友であり、同患者のために美しい青春さえも犠牲にした村井純一氏という「らい病患者のリビングストン」という別名さえ持つ人物をご紹介いたします。この方は今から35年前日本の○○県○○村で、太陽が照り輝いていたある日に産声を上げました。両親の手厚い恵みにより、故郷の普通学校を卒業し、高等師範学校を優秀な成績で卒業しました。某校で教鞭をとりながら、文芸方面にも多くの関心を持っていましたので、村井兄は画家でもありました。

三井輝一と朝鮮③・続

- 村井兄はこの島に来てすぐに、今の東部教会の崔秉洙（チェ・ビョンス）氏、北部教会の李彩権（イ・チェグォン）氏、黄仲五（ファン・チュンオ）氏の三名をはじめ、何人かの同志たちと一致団結して、手と手を取り、歩調を合わせ、村井氏という農夫は、頭に頭巾を播き、靴紐をきつく結び、腕まくりをし、本島民の文盲退治、及び他方では時代の思潮を語り、新しい思考を鼓吹したと聞いています。教友の信仰を養い、**小鹿島のために休みなく東奔西走**し、**満9年（＊1927年～）を一日のように、絶え間なく活動**をなさったと聞いています。ある時には学園の日本語教師として、ある時は教会の伝道師として、またある時は互助会の書記として、ひたすら患者のために多方面で汗水を流した村井兄であります。彼こそは隠れた功労者であり、功徳主でありました。

三井輝一と朝鮮③・続続

- 村井兄はらい患者の機関紙であるラザロという雑誌編集兼発行人として不思議・風変りな筆を走らせ、らい界において多大な衝撃と刺激を与えたこともあります。レベルはそう高くはありませんでしたが、氏の血と汗と涙の結晶であることは相違ありません。

- （＊1935年）8月16日の午後、兄が一生を通して最も印象深く情を注ぎ、しかし恨みも多かったであろう長年の仕事場であり、棲み家であった。いや、青春までも捨てたこの島に背を向けて、果てしなく遠い水平線へと消えた兄の影を見ながら、私は寂しく波打つ海岸を眺めながら、やるせない涙を流したその日。

- 兄が離れて一か月が過ぎたある晩、あめがちなある深夜に、遠くにいらっしゃる兄を思いながら、この文を書き、京城にいらっしゃる金教臣（キム・キョシン）先生に拝します。（終わり）

小鹿島　南生里で　金桂花（キム、ケファ）

長島愛生園へ①

■1933年8月の短期訪問（秋山信義の日記「土塀の花」）

- 八月廿三日　夕方（杉田）星雫のところにいくと、**小鹿島の三井さんと小島さんが来ている**といふ。
- 八月廿八日　両兄（三井、小島）は夕食を鶯舎でとり、私は食後両兄をともなうふて稲荷様迄散歩に出掛けた。帰ると**曙教会の委員達が**待っていてカナリヤー号で**歓迎会**である。
- 八月卅日　五時頃でもあったらうか。安さんとかいふ人が、**両兄は突然今夜当地をたゝれます**といふ。出掛けてみると、両兄は消毒場のところで荷物を受取るところであった。六時半頃両兄は収容場所をたたれた。まったく突然であったにもかゝわらず、海岸は沢山の見送人であった。

長島愛生園へ①・続

- 三井輝一の長島来訪前後に、キリスト教に好意的な小鹿島慈恵医院の院長**矢澤俊一郎**が「依願免」（1933年8月26日）

- 第四代院長に京畿道警務衛生課長の**周防正季**が就任

  1934年9月、国立に移管し**小鹿島更生園と**改称

  「職員患者軋轢　以前ノ園長ト現今ハ全然相違」

  （宮川量記録・三井輝一談「小鹿島更生園の現況」、1935.9）

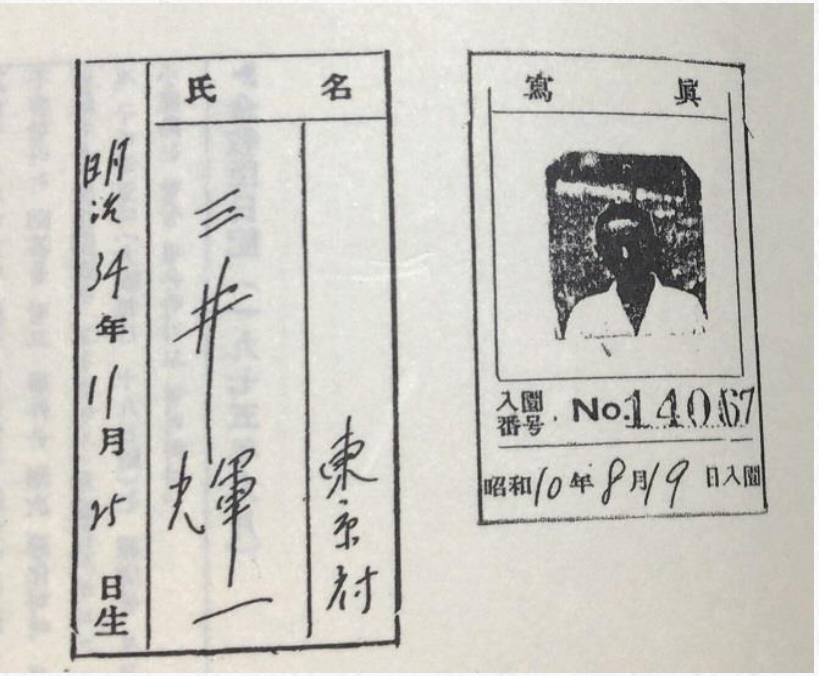
  入所者を動員した拡張工事の連続

  1942年6月20日、入所者に刺殺される

長島愛生園へ②

1935年8月19日、三井輝一は長島愛生園に入園　青山寮に入る

1937年4月22日、退園(ただし楽生院の記録では4月12日に来院)



長島愛生園「死亡者・退園者カード綴込」

長島愛生園へ③

■1936年8月、**長島事件**勃発　入所者の自治要求

●國立癩療養所

患者罷業

岡山の長島愛生園

園長を袋叩き

【岡山電話】國立癩療養所長島愛生園では定員八百六十名のところ現在一千二百十六名の患者を收容約八百名の患者は種々の作業に從事し一日四時間働いて八錢の賃銀を得てゐるが、去る十一日土木作業の約九十名の患者が居殘り制度を復活して十五錢に賃銀を引上げられたいと嘆願したが豫算上不可能なりと一蹴されたので十三日早朝遂に同盟罷業に入つた

彼らは事務員を患者室に拉致し鎭撫に出かけた光田園長を取圍んで棍棒で暴行を加へるなどの狼藉を働いたほか、激昂せる廿名の患者は事務室を襲撃し投石して窓硝子を破壞するなど事態急を告げたので十四日井上牛窓警察署長が調停に乘出した

1936.8.15（読売新聞）

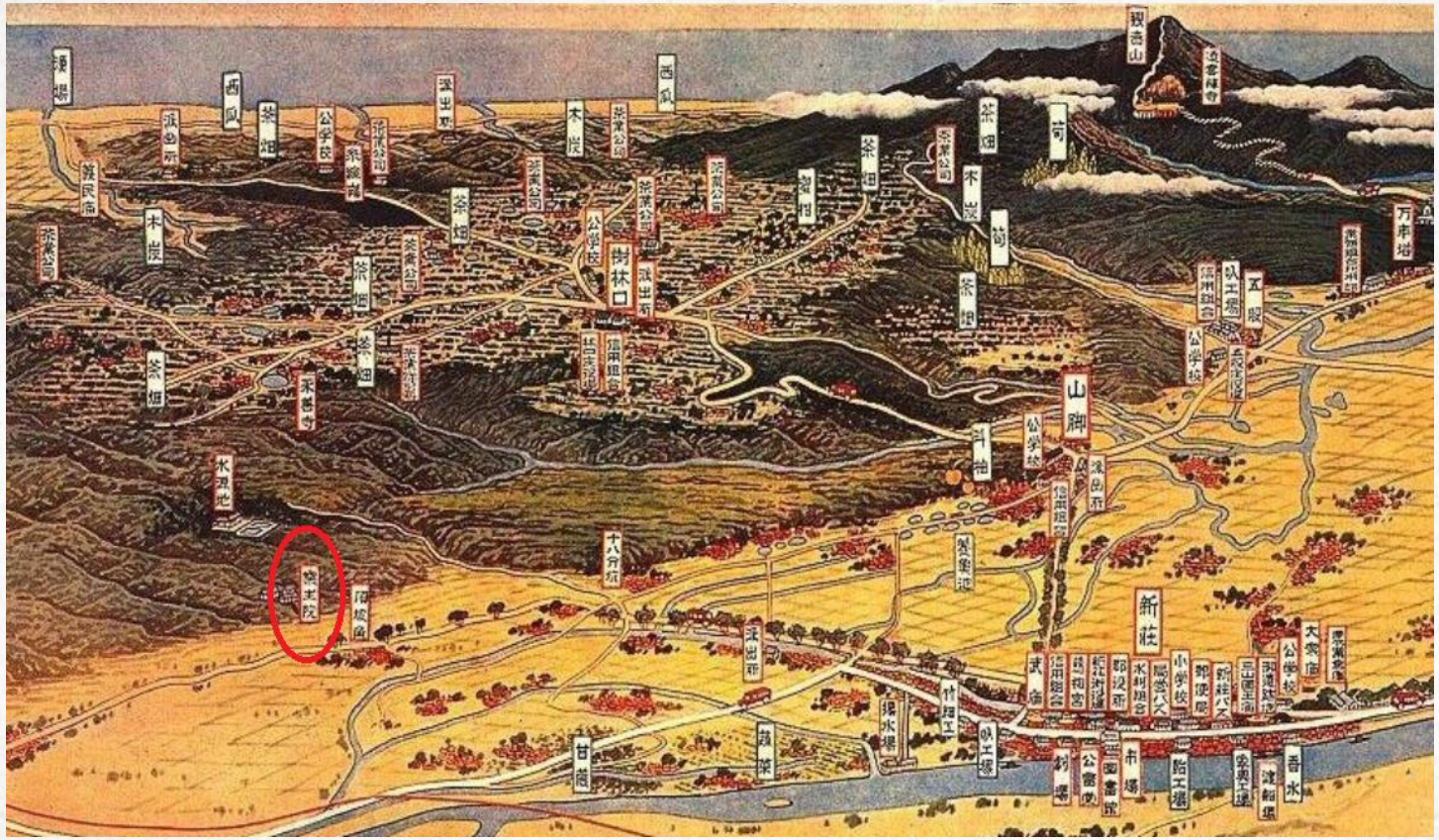
長島愛生園へ③・続

- 自助会の初代常務委員長に木元厳が就任
  安倍千太郎の弟子、曙教会メンバー
  自治要求運動の中核は曙教会の役員＝「騒擾事件元兇」
- 三井輝一も執行委員に選出

- 1937年3月29日、自助会予算編成の不調により、木元厳らは総辞職
- 1937年4月、三井輝一は長島愛生園を退園し台湾に向かう

台湾・楽生院へ①

- 1930年12月12日、台北州新荘郡に癩療養所の**楽生院**開設



金子常光『新荘郡大観』（1934）

台湾・楽生院へ①・続

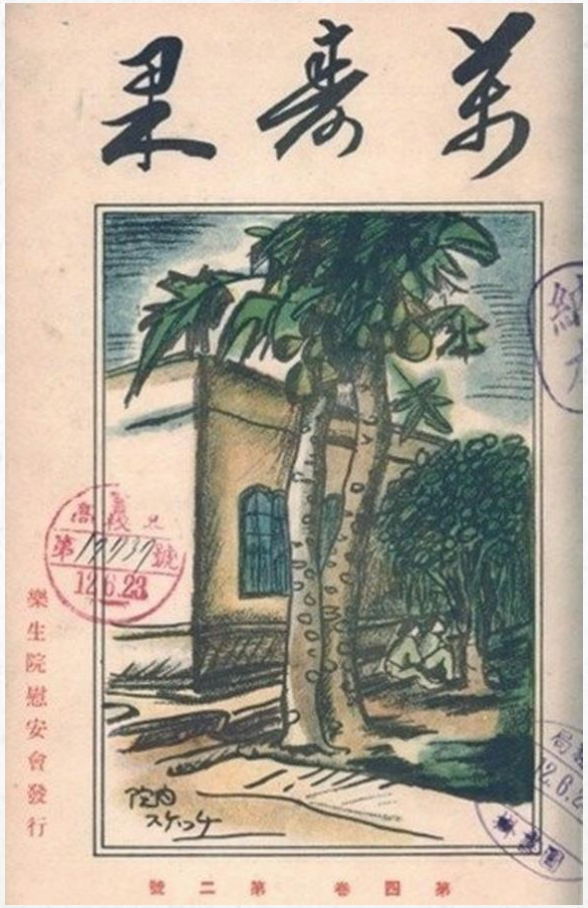
■楽生院に入院直後、『万寿果』「楽生歌壇」に登場（1937.6）

選者は**柴山武矩**（星名『植民地を読む』第9章を参照）

- 風薫る**首里**の城趾荒れはてゝ訪ふ人も今は稀れなり　旧作二首
- **那覇**の宿の静けき夜半を鳴きいでし家守の声にわが目覚めたり
- **われもまた遠く来にけり常夏の国に病み居て万寿果（パパイヤ）を食む**

台湾・楽生院へ①・続続

- 楽生短歌の登場と同号（1937.6）の表紙画を作成（「院内スケッチ」）



青山純三に対する評価

■蘇月生（田中實）「楽生歌壇の人々（一）」（『万寿果』1939.4）

こゝで最近入院した人であるが最も油の乗り切つて居る青山純三君に就いて語りたいと思ふ。君には何回も「万寿果」の表紙絵を書いて頂いたものである。眼鏡をかけた理智的なその眼、物事の奥底迄見極めずには置かぬと云ふ如きその眼を見て居ると自分も共に何かに引き入れられそうである。学識はあり、絵画に対する造詣は深し、君など大いに之から何処迄も伸びる人ではあるまいか。只惜しむらくは君もあまり健康に恵まれず、既に重病棟に在つて歌会にも毎回出られぬ状態である。時に出席するとやさしきその口から洩れる評言には高邁なるものが有り、皆を傾聴せしむる。

青山純三の作品①　病状を詠んだ短歌・俳句

- きざす熱堪へつゝ思ふ死後のことはさすが寂しく想ひつゞかず（39.4）
- くづれたる両手の傷をとみかうみ癒ゆとし見えぬ薬換へまつ（39.6）
- 癒ゆるとし思ふにあらね療院に生きながらへで十年を過ぐ（40.2）
- ひたすらに癒えよと言はすわが兄に変りはてたる症状（さま）は告げ得ず（『台湾』40.12）
- 歌一つなくて過ごせし空白のこの一年をおもふさみしさ（空白、41.7）
- 繃帯のとれて嬉しや更衣（40.8）

青山純三の作品②　台湾の療養所ならではの短歌

- 十年前われもうたひし湯もみ唄（＊草津）昨日入院の湾童うたひ居り（38.12）
- 吹きならすチヤルメラ低くまた高く挽歌は続く長き夏の日（葬列、39.12）
- 舌たらぬながらにかたりつぐ友は蕃山（やま）の生活（たつき）のうつろひをいふ（高砂族の病友と起居を偕にして、41.10）
- ふてぶてしく少年学珍はへんじせずわがよむ歌書にはむしむらがる
- なまなかの同情をもてひきうけしこの児の性に悔いごゝろわく（半島生れの少年をひきうけて、2首、41.10）

青山純三の作品③　戦争を詠む短歌

- あらしさり真珠湾頭寂として破(や)れ艦(ぶね)むなしく列をたゞして（ハワイ攻撃写真を見て、42.5）
- ばんざーいと忽ちあがるかちどきに療舎のあかり今宵まどかに（シンガポールの敵降服の臨時ニュースを聞きて、42.5）

＊同号の『万寿果』に掲載された「戦捷の春」（純三記）は、楽生院の「二月十一日紀元節祝賀学芸会」の模様と「皇軍シンガポール市内に突入」に沸く入所者の姿を詳しく伝える。

青山純三の作品④「残された領域－所謂療養所文芸に対する私見」（41.10）

- 病者にだけ委ねられた仕事＝癩者自身による記録
- 表現に巧拙の差はございませう。が、**誰もが文学者たり、画家たり、音楽家たり得る**
- お互この濁つた眼で、曲つた手で、破れた喉で、萎えた脚で、見たいのです。聴きたいのです。歌ひたい、描きたい、綴りたい、踊りたいのであります
- 望むらくはわがことば書に記されんことを。望むらくは鉄の筆と鉛とをもつてえを永く盤石に鐫りつけおかんことを。と泣き叫んだ**ヨブの声**（＊ヨブ記第19章）**はまた私たちお互の声**であります
- わたくしたちは**私たちの作品価値を懸念する必要はありません。**要は私たちに残された領域をひたすらに掘り下げてゆくことであります

青山純三の最期

- 戦争が愈々苛烈になるに連れ沖縄から疎開した人々が、校庭や廟の庭などに藁を敷いてそこに起居するようになつた為に集団伝染病が流行し、死亡者が続出した。（中略）園内の患者も栄養失調のための死亡率が高くなり、自分自身も何時仆れるか判らないので、遺言状まで書いていつでも喜んで死ねる覚悟をした。

- 私の同室の青山君と、高砂族の一兄弟で信仰に入つてよき証詞をしていたアカオ（日本名蓮田）君とが栄養失調から来た腎臓炎に罹り、全身がゴムマリのように腫れ上がって同時に病床についてしまった。然し誰も介抱する者が無かつたので私は極めて多忙の中に在つたが、彼ら二人の介抱をも引受けねばならなかつた。（小倉兼治『瀬戸のあけぼの』）

- 1945年7月22日、楽生院で死去（享年44歳）

おわりに

- 望むらくはわがことば書に記されんことを。望むらくは鉄の筆と鉛とをもつて之を永く盤石に鐫りつけおかんことを。と泣き叫んだヨブの声はまた私たちお互の声であります（「残された領域－所謂療養所文芸に対する私見」）という青山純三の願いはかなったのか？

- これは友の無情に失望して、今の人の誰人にも訴うるの無益を悟りて後世に知己を求めんとの心より出でし言である。まずわが言の書き留められんことを望み、次には書物に記されて遺らんことを望み、最後にはその言が鑿のみを以て磐に刻まれてその中に鉛を流しこんで永久に遺らんことを望む。（中略）かくして彼が己おのれの言を後世に遺すときは、必ず彼の罪なきに受けし災禍を認めて彼の同情者、弁護者、証人となるものが出ずるであろうとの期待を抱いたのである。（内村鑑三『ヨブ記講演』1925）